

＜日本イギリス哲学会 第67回関西西部会例会 報告要旨＞

報告1： ヒューム『人間知性研究』第十二章のピュロン主義的読解

澤田 和範

ヒュームはピュロン主義的な懐疑主義者であるという解釈は、ポプキンやフォグリンの研究をその代表として、おそらく途切れたことのない一筋の解釈伝統として受け継がれてきたと言えるだろう (Popkin 1951; Fogelin 1985; 澤田 2021)。しかし、こうしたピュロン主義解釈にとって厄介な問題になるのが、『人間知性研究』第十二章の記述である。ヒュームはそこで明らかにピュロン主義を退けて、「アカデミー的」懐疑論というきわめて穏健な立場を擁護しているように見える。そうした記述がヒュームは一種のピュロン主義者だという解釈といったいどのように両立し得ると言うのか。あるいは、仮に『人間本性論』で提示された哲学がピュロン主義的だと認めるとしても、それはヒュームが『人間知性研究』において辿り着いた最終的な立場とは異なっているのではないか。このような反論が容易に予想される。

本報告は、ピュロン主義解釈に対するそのような批判の是非を見定めるべく、『人間知性研究』の問題の箇所を詳しく検討してみようとするものである。我々の議論の焦点となるのはこの書物の特殊事情である。私は以下のように論じる予定である。『人間知性研究』第十二章を、素直に、反ピュロン主義的に読むとき、我々は少なくとも四つの不可解な記述に遭遇することになる。しかし、ヒュームはピュロン主義の一種をむしろ擁護しようとしているのだと想定すれば、我々はそれらの不可解な記述すべてに筋の通った読解を与えることができる。じつは『人間知性研究』は、それに対する表面的な読解がしばしば通用しないような、悩ましい著作なのである。かくして、『人間知性研究』第十二章も、その外見に反して、『人間本性論』と同様に、究極的にはヒュームのピュロン主義的な立場を擁護するものと解釈されなければならない。

(日本学術振興会特別研究員 PD・関西学院大学)

報告 2 : 危害原理と「自分にかかわる行為」

鈴木 英仁

ミルの『自由論』において、長らく批判の対象となってきたのが、「自分にかかわる行為」(self-regarding actions)／「他者にかかわる行為」(other regarding actions)の区別である。ミルによれば、自分だけにかかわる行為はもっぱら個人の領域であり、政府や世論による社会的介入は正当化されない。しかし、批判者によれば、そもそも(因果的に)他者に関係しない行為など存在しないため、不当な区別を前提とするミルの議論は失敗しているという。

このような見解に抗して、1960年代には、この二分法を死活的利益(vital interest)の概念から理解しようとする研究が現れた。リースによれば、ミルの言う「自分にかかわる行為」は「他者の死活的利益に影響しない行為」を意味しており、それゆえ上の批判はあたらないという(Rees 1960)。しかしながら、リースの解釈は、テキスト上の根拠が薄弱であるのみならず、ミルの他の著作での言葉遣いと符合しないという問題が既に指摘されている(cf. Turner 2014)。

他方、ソーンダースは近年、危害原理にかんするミルの議論は「自分にかかわる行為」の概念にはほとんど依拠していないという解釈を提示している。しかしながら、ソーンダースの解釈は、自分にかかわる行為／他者にかかわる行為の二分法が『自由論』においていかなる積極的役割を担っているのかを論じていない点で片手落ちであると言える。更に、私の見るところでは、彼の解釈は『自由論』第五章で論じられる具体例、とりわけ自由取引に関するミルの議論と必ずしも整合しない。

本発表では、以上の先行諸解釈を批判的に検討し、(1)自分にかかわる行為／他者にかかわる行為の二分法がいかなる区分であるのか、そして(2)この区分が『自由論』全体のプロジェクトにいかに寄与するのか、の二つの問いに答えることを試みたい。

(京都大学・日本学術振興会特別研究員 DC)

主要な先行研究

- Rees, J. C. 1960. "A Re-Reading of Mill on Liberty." *Political Studies* 8 (2): 113–29.
- Saunders, Ben. 2016. "Reformulating Mill's Harm Principle." *Mind* 125 (500): 1005–32.
- Ten, C. L. 1968. "Mill on Self-Regarding Actions." *Philosophy* 43 (163): 29–37.
- Turner, Piers Norris. 2014. "'Harm' and Mill's Harm Principle." *Ethics* 124 (2): 299–326.